

暗示とその周辺問題

岡 一 太 郎

Kazutaro Oka : On Suggestion and its Related Problems

昨今の解離性障害への関心の高まりの中で Janet の再発見が世界的になされているにもかかわらず、Janet が終生問い続けた暗示という問題は管見ではなお講壇精神医学において等閑視されたままのようである。今回、その再検討が必要であるという Janet の強い促しに従って暗示の考察を試みた。暗示は Mesmer—Puysegur—Freud という力動精神医学の系譜において理論的・実践的に形を変えながらも一貫して個別主体の意志の力動関係すなわち能動的な暗示者と受動的な被暗示者という構図に還元されてきた。これに対して我々は Janet の初期暗示論とそこで参照されている Biran の経験論のうちに従来とは異なる見方の端緒を取り出し、暗示の基盤に中動的過程があることを論じた。また Janet と互いに影響を与え合った Bergson に依拠しつつ人が——正常か異常かを問わず——総じてつねに自身の歴史性を十全に担った自己であるわけではなく、とくに暗示において非自的になり得ることを指摘した。この中動的過程と非自己化という暗示の二契機から暗示の周辺問題としてヒステリーを考察し、ヒステリーとの関係において統合失調症、離人症などにも言及した。なお上述した暗示へのアプローチの中で、Freud のいう心的装置の最表層に、間主体的な中動的過程によって規定されている無意識が見出された。

<索引用語：暗示、ピエール・ジャネ、ヒステリー、中動態、無意識>

はじめに

Janet, P.²¹⁾が晩年近くに自らの研究の来し方を振り返りつつ慨嘆していたのは、暗示に対する関心が19世紀末ににわかに高まり、それを取り上げた心理学関連の論考は文字通り枚挙に暇がなく、人々は専ら暗示についてしか語らなかったにもかかわらず、その後間もなく暗示への関心が潮の引くように急速に衰えたことであった。19世紀末は当時すでに世界的名声を博していた神経科医であった Charcot, J. M. がヒステリーとともに催眠も自然科学としての医学へ導入するという力業を成し遂げ、短命ながら暗示を精神医学の主役に

まで押し上げた時代であった⁶⁾。昨今、解離性障害研究が活況を呈し Janet への回帰が声高に説かれており、そこに19世紀末の精神医学の再来をみる向きもあるが、暗示という主題は表舞台からは下ろされたままのようである。なお、この小論で取り上げる催眠はそこで暗示が施されるものを意味しており、暗示なき催眠は想定していない。

以下、単行本文献からの引用が複数にまたがる場合は頁数をそのつど表記する。海外文献に関しては邦訳を参照した場合は〔・頁〕、原著からの場合は〔p.・〕と表記する。

暗示が不遇をかこっている理由について

Janet²¹⁾は、催眠をめぐるナンシー学派とサルペトリエール学派の論争などいくつかの要因を挙げているが、Freud, S. への言及はそこにはない。しかし Charcot と Bernheim, H. という両学派の首領と接点をもち、「私はかつて Bernheim の門下で」⁹⁾あったと自認さえする Freud の影響もまた無関係ではなかったであろう。Freud にとって「真の精神分析の歴史は、催眠を放棄した技法上の革新によってようやく始まる」⁸⁾のであり、転移のみで症状を除去することは「しよせんは暗示治療であって、精神分析ではない」⁷⁾と厳しく評される。他方で Freud は「精神分析は、催眠現象から継承したものを一つの遺産として管理しているのである」¹¹⁾とも述べており、彼の催眠ないし暗示に対する評価は否定的一辺倒ではない。こうした Freud の複雑な態度がよく表れているのが『集団心理学と自我分析』¹⁰⁾である。暗示それ自体が正面から論じられたこの論考の中に「一八八九年、私自身が彼（引用者註：暗示治療で高名な Bernheim を指す）の驚嘆すべき技能の証人となった。しかし私は思い出すことができるのだが、暗示のこの圧制に対しては、当時もぼんやりした反発を抱いていた」¹⁰⁾〔154 頁〕と約 30 年前の経験を回顧するくだりがある。ここには催眠に積極的でありながらも当時の Freud が暗示に対する一種の生理的な嫌悪感を抱いていたことが示唆されている。

このことを支持しているのが、先の引用部のあとに続く「私の抵抗は、その後、暗示がすべてを説明するとしながらそれ自身は説明を免れるとされることに逆らう方向を取るに至った」¹⁰⁾〔154 頁〕という一文であり、暗示を主題化する Freud の動機がそもそも暗示に対する彼の「反発」や「抵抗」にあったことがわかる。講壇精神医学において暗示が黙殺され続けている主な理由の 1 つは、こうした対人的な「圧制」に対する陰性感情にあるように思われる。しかしまさにそうであればこそ、Janet の力説する通り、暗示は積極的に主題化されなければならない。

この小論では、まず主要文献である Freud の暗示論を力動精神医学史の中において見直すことを

通して、検討すべき課題のありかを見当付ける。次にその課題と取り組むべく、Janet の初期暗示論を参照するとともに、Janet に少なからぬ影響を及ぼした de Biran, M. と Bergson, H. の論考も手がかりとしながら暗示を考察する。その上で暗示の周辺問題としてヒステリーや統合失調症などの精神病理を扱うことにする。なお我々は暗示治療を日々実践しているのでもなく催眠関連学会に属してもいない。そのような門外漢の立場からの考察は初歩的な誤解を免れていないかもしれないが、開かれた場で暗示を議論する呼び水にはなり得るのではないかと思われる。

I. 暗示の文献的検討

文献の検討において注視されるべきなのは暗示の直達的な影響力がどこに由来するのか、また暗示者と被暗示者はいかなる関係にあるのか、という暗示の存在を肯定する者であればおそらく誰しもが抱かずにはいられない問いがどのように扱われてきたかということである。以下ではこの問いに自覚的に取り組んだ Freud の暗示論を、彼の先行者で催眠療法ひいては力動精神医学の成立と発展に大きく寄与した Mesmer, F. A. と de Puységur, R. とともに検討する。

1. Mesmer と Puységur

祓魔術から動物磁気へという力動精神医学史上の最初の転回をもたらしたのが 18 世紀後半に活躍した Mesmer であった。彼は自らが行った磁石を用いた治療を端緒にして、「宇宙に遍在する物理的流体」〔上 175 頁〕すなわち「動物磁気」〔上 68 頁〕なるものが存在しており、人体内にある動物磁気の「失調」〔上 175 頁〕が病気の原因であり、この流体の「平衡」〔上 71, 175 頁〕を回復させれば病気が治癒するという理論をたてた⁶⁾。磁気術師が自らの流体を患者に作用させて、潜在的であった疾患を顕在化させる「分利」〔上 71, 73 頁〕を何回か生じさせる中で、分利自体が次第に軽減していき遂には消え去るのであり、それとともに病気も治癒した⁶⁾。Mesmer の忠実な弟子の

1人であった Puységur において磁気術から催眠術への移行を媒介する第二の転回が生じる。具体的にはそれまでの磁気術ではてんかん患者ならてんかん発作の「分利」が起きていたが、Puységur の磁気術において患者は磁気術師とのみ選択的な交流をする夢遊病状態となり、磁気術師の命令のままに実行し、分利終了後に健忘を残した⁶⁾。この現象は当時「磁気睡眠」⁶⁾〔上 136 頁〕とも呼ばれた。治療実践の中で Puységur は Mesmer の似非物理学的理論から離れ、治療的に作用しているのは「物理的流体」ではなく「磁気術者の意志」⁶⁾〔上 83 頁〕であるとされた。

Mesmer ではたしかに被暗示者に作用するのは動物磁気であると信じられていたが、この流体を意図的に動かすのは暗示者であると彼がみなしていたことを考慮すれば、「流体説」と「心理説」⁶⁾〔上 175 頁〕という理論上の相違は相対的であり、Puységur は Mesmer においてなお無自覚にとどまっていた暗示者の意志のもつ意味をそれとして取り出したといえる：「患者の苦しみを和らげ治そうという、唯一で絶対の意志をお持ちなら、私は確信をもって成功をお約束いたします」⁴⁾（強調は原著者）。なお被暗示者の役割は Puységur において服従という形でしか認められていなかった：「その患者が（磁気分利のときに）あなたに全面的に服従するようになさなければいけません。自分だけの意志をもつ可能性すらあつてはいけません」⁴⁾。直前の引用文と合わせてみると、絶対的な意志をもつ暗示者と意志をもつ可能性すらない被暗示者との間に明らかな対照があり、暗示の直達的な影響力はこの圧倒的に不均衡な関係に帰せられている。

2. Freud

Freud は先述したように暗示に対する抵抗感を動機として『集団心理学と自我分析』において精神分析的な暗示の解釈を試みているので、以下にやや詳しくその議論を辿ってみる。

集団形成には個人が他人に「自分を合わせ、その人にいかなる反発も感じない」¹⁰⁾〔171 頁〕とい

う特性があり、そこに「ナルシスの自己愛の制限」と「集団のメンバー相互間における新しいタイプのリピード的拘束」が見出される¹⁰⁾〔172 頁〕。後者に関して食人種が人を食べることで取り入れるのに喩えられる「同一化」¹⁰⁾〔177 頁〕という機制が論じられ、指導者とのつながりに基づいて相互に同一化し合うことで集団のメンバー間に拘束が成立するとされる。そして「ナルシスの自己愛の制限」を説明するのに「恋着」に注意が向けられる。恋着では「制止されない性的欲動と目標制止された性的欲動の協働」¹⁰⁾〔182 頁〕のために「感性的な慾」¹⁰⁾〔同頁〕が抑制され、恋着の対象は理想化されるとともに、そこへと「ナルシスのリピードが溢れ出し（中略）対象が、到達できない自分の自我理想の代わりをする役目」¹⁰⁾〔183 頁〕を負うようになる。以上の議論に基づいて「集団は、同じ一つの対象を自我理想の代わりに置き、その結果、自我が互いに同一化してしまった、相当数の個人から成る」¹⁰⁾〔188 頁〕（強調は原著者）という定式が導き出される。催眠では受け手の自我理想に催眠術師がとってかわり¹⁰⁾〔184 頁〕、「直接の性的追求の脱落」によって催眠は恋着から分けられた¹⁰⁾〔186 頁〕。

先の定式はよく知られており、また「自我理想」と「同一化」はともに「超自我」の概念形成に大きく寄与し、メランコリーの考察の際に参照されるという意味でも重要であることは論を俟たない。しかし見落とされるべきでないのは「催眠そのものには、しかし——直接的な性的追求が排除された恋着であるとする——ここまでの合理的な説明をすり抜ける特徴が依然として含まれている」¹⁰⁾〔187 頁〕という自説の相対化である。我々が注目するのは、先の定式では集団心理と催眠の「謎」¹⁰⁾〔188 頁〕は未解決のままであるとしてさらに展開されていく議論である。

催眠術師は相手を催眠状態へと誘導し、この睡眠類似の状態において「原始から相続してきた遺伝的資質の一部」¹⁰⁾〔202 頁〕が呼び戻される。ここで「原始」と言われるのは Freud が「原始群族」¹⁰⁾〔195 頁〕なるものを想定しているからであ

り、「原父」¹⁰⁾[198頁]との関係が暗示において再現される。先の引用部にある遺伝的資質は父子関係の中でも再生される類のもので、そこで父親は「きわめて強力で危険な人物」として登場し、そのような父親に対しては「受動的-マゾヒズム的な態度」をとるしかないとされ、父親を前にして「人はその意志を失わずにはすまなく」なる¹⁰⁾[202頁]。このような「原始群族」における原父とその息子をめぐり集団心理学が、暗示者と被暗示者からなる集団にも適応される。原史から遠く離れた今日もなお集団は指導者の「無制限の暴力に支配されることを欲しており…隷属への渴望を抱いて」¹⁰⁾[203頁]おり、自我理想にとってかわった原父の集団理想に支配されることになる。

Freudの暗示解釈においては転移関係の中で暗示者は原父に、被暗示者はその息子になっており、原父のように危険なまでに力にあふれた暗示者に対してその意志を喪失してしまうとされる*1。暗示者はその強大な「暴力」をもって被暗示者を支配すると書かれており、Freudがここでいう原父とその息子の関係は、先にみた Puysegur における絶対的な意志をもつ暗示者と全面的に服従する被暗示者の対比に呼応している。ただし被暗示者も「支配されることを欲して」という仕方で暗示者に服従する意志を働かせていることに Puysegur との相違が見出せる。たしかに無意識へと問題となる心的次元が移され、転移を扱うという解釈の根本的な革新が Freud においてなされている。しかし暗示の不合理な作用は無意識へと場所を変えつつも究極的には主体の意志に帰されており、この点に限っていえば Freud は Mesmer や Puysegur とともに1つの系譜をなしている。

なお我々がここでいう無意識の主体はたとえば Freud の超自我に関する次の論述に示されている

主体に相当する：「自我とはもっとも本来的な意味での主体なわけですから、そのようなものをどうして客体にすることができるのでしょうか。ところが、それができるのです、そのことに疑う余地はありません。自我は自分自身を客体化することができます」¹²⁾[76頁] (強調は引用者)。ここで論じられている主体は主客関係という枠組みにおける主体であって、主体は客体に働きかけ、客体は主体によって働きかけられるものとして捉えられており、対象関係論の先駆けとも言える「自我の下位区分」³⁰⁾を通して超自我と自我の間に主客関係が成立し、超自我は自我を「観察したり、批判したり」¹²⁾[76頁]する。そして引用文中で強調した「自我」すなわち超自我は「エスと深い関係にある」¹²⁾[102頁] 無意識の主体の1つに他ならない。そもそも「もっとも本来的な意味での主体」である自我それ自体が超自我とともに「通常は無意識的」¹²⁾[91頁]なのであってみれば、客体に働きかけるという一般的な意味での「主体」を Freud のいう無意識に認めることに困難はない。そして範例的には「かつて抑圧を実行し、今もそれをきちんと支えようとしている自我の意志表示でしかありえない」¹²⁾[90頁] (強調は引用者)*2という「抵抗」に関する叙述にあるように、無意識の主体についてその「意志」を論じることは Freud 自身がしている。彼は意識・前意識・無意識を区別する第一局所論と自我・超自我・エスからなる第二局所論が一致しないことを明言しており¹²⁾[95頁]、主体たる自我そして超自我が無意識に通常あることは両局所論のズレを構成する。このズレの領域の記述に際して「批判したり」や「支えよう」といった能動態を中心とする主体の文法を適用することは、Freud の精神分析における理論的支柱の1つであったように思われる。

本論に戻れば、暗示は Mesmer から Freud に至

*1 Freud の議論において転移関係は患者が睡眠類似の状態に入って初めて成立することになっており、患者をこの状態にもっていく暗示の効力は転移以外のいかなる機序に基づいているのかという問題が残されている。

*2 なおこの引用部の原文は以下の通りであり、訳文中の「意志」は原文では名詞ではなく「意志する」を意味する助動詞“will”として出てきている：“Der Widerstand kann nur eine Äußerung des Ichs sein, das seinerzeit die Verdrängung durchgeführt hat und sie jetzt aufrecht halten will.” ¹²⁾[S.75]

る系譜におけるように個別主体の意志の力動関係に還元するしかないのかという疑問が頭をもたげてくる。この疑問は暗示、そして暗示に依拠する催眠や集団心理に対して Freud¹⁰⁾が「神秘につつまれて」〔187頁〕「不気味な」〔199頁〕「奇跡が起こる」〔205頁〕という表現をあてて強調したその不合理な側面を主体性の文脈の中でどこまで捉えられるのかという問いにつながる。Freud¹⁰⁾は集団心理学の先行研究として自らが参照した Le Bon, G., Sighele, S., Trotter, W. について前二者ではフランス革命、後者では第一次大戦がその研究に影響を与えたとしているが、1921年に刊行された彼の『集団心理学と自我分析』も同様にその着想を「明らかに一九一八年の終りに起ったハプスブルク君主国の崩壊と、それに続くパニックと危難から」⁶⁾〔下126頁〕得ている。これらの歴史的出来事に加えて、ファシズムの国家レベルの熱狂的受容という際立った集団の病理にも思いを致すとき、個別主体の主体性がそこで相当に制限を被っているといわざるを得ないように思われる。とはいえ集団の病理が——自己の主体性を脅かす他者の在り方も含めて——統合失調症のような精神病水準にないことはたしかである。しかし暗示とその関連事象に対しては、世界史をも左右するその不気味な影響力を十分に捉えるために、Schneider, K.³⁸⁾の「基底」がそうであるように「精神病か反応か」という古典的な図式が無効になる特異な領域³⁴⁾にそれが位置している可能性を想定することも必要ではなかろうか。以下、こうした問題意識のもとで暗示を検討していくことにする。

II. 暗示という現象

Janet²¹⁾が挙げた次の例には直達的な対人作用としての暗示が印象深く記述されている。若い女性にJanetは「あなたに大きな不幸が訪れました。あなたの首は切断されてしまったのです。自分を鏡に映してあなた自身で確かめてごらん下さい」と伝える。するとその女性は自分の首を用心深く手探りし、椅子から立ち上がって鏡を見やって悲しげに言う、「本当。首がなくなってしまうのはな

んで醜いこと」と。Janetは暗示を「意志に基づく同意を介することなしに、ある人が他の人に影響を及ぼすこと」¹⁹⁾〔pp.139-140〕と定義し、この種の暗示が例外的にしか健常者には認められないとした。これに対してBernheimは暗示を「それによって観念が脳へと導入され、脳に受け入れられる作用である」²⁰⁾〔p.206〕と定義し、「弁護士、説教師、教授、演説家、卸売り商人、山師、女たらし、国政を司る人などは、暗示をかける人である」⁴⁰⁾として暗示の領域を異常心理に限定せず大幅に拡大した。我々は暗示の内包としてはJanetの定義を採用し、その外延についてはBernheimの見解に与する。日常生活の中にはそれとして目立たないながら、Janetのいう定義を満たす暗示現象が見出せるように思われるからである。なおBernheimの定義を採らないのは、Janet²⁰⁾が批判する通りその規定があまりに一般的すぎる他、「観念」という表現が示すように言葉の意味に重きを置き過ぎているためでもある。たしかに暗示に具体的な内容を与えるのは言葉である。その一方で、文言さえ同じであれば誰がどのように唱えても暗示が成功するわけではない。このことは「病像賦形的」・「病像成因的」という対の術語にならなければ、言葉の純粋な意味内容それ自体は「暗示賦形的」であるのに対して、声音や口調といったいわば言葉の身体面ないし前言語的な要因の方が「暗示成因的」である可能性を示唆する。

範例として挙げたJanetの斬首の暗示ほど鮮やかではないが、我々は「意志に基づく同意を介することなしに」という条件を満たす暗示現象を若干ながら経験したことがある。具体的には、①暗示実演の立会者として、②いわゆるヒステロエピソードの入院患者に暗示をかける暗示者として、③日常の何気ない場面で暗示を被る被暗示者として、それぞれ異なった形で我々は暗示の影響力に触れており、以下にその経験を記述する。

①臨床において催眠療法を実践している精神科医によって50人ほどの医療関係者を相手にした催眠の講習会が開かれた。一通り催眠について

の説明がなされた後、催眠の実演がそこに聴講に来ていた1人の女性を相手に行われる。講師は彼女を壇上の椅子に座らせ、呼吸や体の力の入れ具合などについてその女性に穏やかに語りかける。女性は目を閉じ、リラックスした様子で両手を足の上に置いて静かに自然な姿勢で椅子に座っている。彼女がただ普通にそうしているのか、催眠状態に入っているのかどうか、そこに参加している我々にはその時点では判断がつかない。やがて「あなたの右手がゆっくりとスーと上がっていきます」という暗示が与えられると、被験者である女性の右手がその通りに上へ動いていく。見物している我々がその光景に息をのむと、唐突にその被験者が自らの右手の動きの不思議さ・滑稽さに耐えかねたように笑い出し、「なんで、なんで？」という声をあげる。そのとき、壇上にのぼらずに後方の席でこの実演を我々とともに見物していた1人の女性にも同様の変化が生じ、その人は恥じ入り顔を真っ赤にして下を向いてしまうが、皆の視線が壇上の被験者から彼女へと一斉に振り向けられ、いよいよその赤面が強まる。

右手が上方に動いた2人のうち壇上にいなかった女性は、その振る舞いから推測するに、自分と周囲に起きている状況をそれとして認識していたと思われ、その意味で典型的な催眠状態にはなく覚醒していたはずであるが、それでも暗示はその言葉通りに遂行されたようにみえる。ちなみに Janet も Bernheim も暗示が覚醒状態で可能であると指摘している²⁰⁾。

②早産にて未熟児で生まれたその女性患者は2歳より全身けいれん発作が出現し、7歳以後いったん発作はおさまっていたが13歳のときに再び大発作を来した。それからは明らかにならん発作なく経過しているが、15歳頃より些細なことに刺激を受けて急に脱力して倒れてしまうようになる。20代になると、とくに父親が病弱な母親の世話などで患者の相手を十分にできない状況下で、急に倒れて何時間も昏迷様状態になったり、後弓反張を伴った全身けいれんを起

こすなどのヒステリー性の反応を容易に示すようになる。両親も亡くなり50歳を超えた現在は、後弓反張を伴った派手な「けいれん」はなくなったものの、なお失声、失立、失歩がしばしば出現する他、数時間以上にわたって脱力して無言無動のまま臥床し閉眼していることが稀ならずあり、入院生活を送っている。これらのヒステリー症状はいずれも治療スタッフに陰性感情を多少なりとも抱かせた。なお昏迷様状態のときに脳波検査が繰り返して施行されているが、正常時の脳波と比べてとくに大きな変化は認められない。

食や喫煙へのこだわりが比較的強く、食事や嗜好品の時間になると通常の状態に回復する傾向がみられたが、あるとき上述した昏迷様状態が重症化し、食事や喫煙という契機があっても回復せずにベッド上で長時間寝たきりとなるため服薬も困難な時期があった。この状況を打開しようと筆者は、ベッドサイドにて中立的な態度で一連の神経学的検査をして問題がないことを確認し、そのことを本人に伝えた上で、「あと半時間もすればまた歩けるようになります」と昏迷様状態が解けるまでにかかる時間を具体的に患者に告げることにした。その結果、毎回ではないにせよ、回復するまでの時間が明らかに短縮化し、ときにはほぼこちらが指定した通りの時間にベッドから起き上がることもみられ、周囲を驚かせた。なお本人にどのようにして目が覚めて体が動くようになったのか尋ねても、「自然に」そうなる、としか答えず、治療者による予言的な暗示を意識化して想起したことは一度もない。

③それは1日の外来当番を済ませた夜に車で帰宅する途中、セルフ式のカソリンスタンドに立ち寄って給油しているときであった。視野の端にアルバイトとおぼしき若い男性スタッフがパンフレットらしきものをもってこちらに向かってくるのが見えた。また何かの勧誘であろうと思ひ、些細なことではあるものの仕事を終えた後ということもあって、その勧誘が少なからず煩

わしく感じられて、予め断ろうと心の中で決めていた。案の定その青年は自分のすぐ近くまでやって来ると、「…のカードを作ってもらったら…になるんですけどお」とくだけた口調で話しかけてくる。この誘いを適当に断ろうと相手の顔もろくに見ずに答え始めたところ、「そうですね、じゃあ」と彼の勧誘に半ば快く半ば仕方ない風に応じている自分の声が聞こえてきて思わず耳を疑った。たしかに自分は拒絶すると前もって心積もりしていたはずなのに、その意図とは全く反対の行動を自分はとっている。半ば仕方ない風に応じたのであれば躊躇いや迷いが介在していたのではないか、という疑義が出されるかもしれないが、もしそうならば自分の返答にあれほど驚き戸惑うことはなかったであろう。「半ば快く半ば仕方ない風に」という相反する形容が意味しているのは逡巡や葛藤ではなく、主人を差し置いて勝手にしゃべっている声の謎めいた捉え難さである。内心は一体何が起きたのか理解できず、気色悪さをぬぐえないまま、表面上はとりつくろってスタッフの求めに従って手続きを済ませ、早々にガソリンスタンドを後にした。

帰途の車中は専らこの珍事が自分の頭を占めていた。自分は外来診療後の多少とも疲弊した状態にあり、青年はたまたまなのか、そういう術を心得ているのか、目の前の相手であるこちらの懐に入り込んで彼がそう望み、そしてこちらがそうしないと意図していたことを実現させた。これはまさに「意志に基づく同意を介すること」¹⁹⁾であって暗示現象とみなすことは不可能ではない。このようにして説明がついても、自分が事前および事後からみれば明らかに意に反しているにもかかわらず、事の最中は他人の思う通りに自ら行動した不可解さは少しも軽減せず、作りたてのカードはその不気味な力で意のままに自分を動かした他者の呪縛を文字通り「断ち切る」ため帰宅後すぐに錠を入れて捨てた。

わずかな経験ながら我々にとって暗示の「圧制」を知るには十分であり、また暗示が催眠という特殊な機会だけに限られず、日々の臨床や日常生活において問題になる場合があることも示されたと思われる。我々の経験の乏しさを補うという以上に、多くの貴重な洞察を含んでいることから次にJanetの暗示論を参照し、それを通して暗示の時間や主体といった諸局面を検討していく。

Ⅲ. Janetの暗示論

Janetはその長きにわたる臨床研究の初めから暗示現象への関心を終生もち続けたが、晩年近くになって自らの初期暗示論を厳しく批判するに至り、その暗示論は初期と後期でその内容を大きく変化させる。そこで彼の二種の異なる暗示論をその両者を分かち自己批判も含めて概観する。

1. 初期暗示論

第一主著『心理自動症』¹⁹⁾の中でJanetは暗示を現象的に規定する主な特性として「自動症 (automatisme)」と「意識下性 (subconscient)」の2つを取り出す。Bergsonにならえば生のあらゆる現象には時間の痕跡が残されているはずであるが、Janetはそうした「創造的活動」と並んで、過去の保存ないし反復として一様なままにとどまる少なからぬ部分が存在すると主張し、このような「再生産的活動」を自動症と名付けた¹⁹⁾ [p.60 (Préface)]。自動症は1つのシステムへと統合された諸要素から構成されており、その中の1つの要素が作動すると他の全ての要素も秩序だてて規則的に展開し、主体がそこに関与することはないとされる。そのため自動症的過程はそれが発動しても当の主体には意識化されず、しばしば意識下にとどまる²¹⁾。

意識下の自動症である暗示が成立する条件としてJanetは、今ここで与えられている諸現象をそのつど組織化する総合能の低下を論じ、これを「意識野の狭窄」¹⁹⁾ [p.195]として概念化した。ここでヒステリーという精神病理の本態として知られているこの鍵概念の出自がもともとは暗示に

あったことを強調しておきたい。というのもそのことが Janet のヒステリー論において暗示の占める位置をよく示しているからである。意識野には視覚、触覚、筋肉感覚などの各様態において多数の「感覚 (sensation)」¹⁹⁾ [pp.38-39, p.199, p.306] が存在している。これらのたえず変化しつつある「感覚」はその多数が総合され凝縮した「知覚 (perception)」¹⁹⁾ [p.38, p.199, p.307] へとまとめられるが、この知覚はそれを構成する諸感覚という部分の集合に還元され得ない全体とみなされる。知覚には感覚のみならず解釈や記憶も含まれていることから、知覚の成立は「自我の観念 (l'idée du moi)」 [p.199] ないし、たとえば「私が見る」と発言する「人格 (personnalité)」 [p.307] の形成をもたらすという¹⁹⁾。それゆえ感覚と知覚はそれぞれ「非人格的 (impersonnel)」「人格的 (personnel)」¹⁹⁾ [p.314] と形容されて対置される。前述の総合活動が機能不全に陥ると、知覚される諸感覚が制限され、総合を受けない感覚は主体によって気付かれないうことになる。「部屋を一周しなさい」という暗示の場合、被暗示者はその行動の愚かさ、周囲の嘲笑などが意識野の狭窄のために認識できずに実行に至る。以上の議論をもとに Janet は暗示を「知覚の自動症」¹⁹⁾ [p.200] とみなした。

Janet の初期暗示論には Freud の場合と異なり「支配されることを欲して」などの主体の文法を用いた暗示解釈は見出せない。むしろ反対に Janet においては意識野の狭窄によってたとえば「欲する」という主体の主体性そのものが一定の制限を受けることが暗示の成立条件とされている。

2. 自己批判と後期暗示論

70 歳を前にして Janet²¹⁾ は自らの初期暗示論を回顧しつつそれに手厳しい批判をくわえる。その際、自動症も意識下も暗示のみに特有の標識ではないことが確認され、暗示における「異他的な作用 (action étrangère)」²¹⁾ の重要性が指摘される。たしかに自動症も意識下も被暗示者という個別主体内部の事態しか扱えていない。この自己批判か

ら Janet²¹⁾ は暗示を「信念 (croyance)」として捉え直すことを試みる。しかし後期暗示論では信念の階層論に力点があり、自他関係は十分に問われていない。Janet の初期暗示論には彼がその可能性を開いておきながら展開させずに閉じていた別の見方があり、それによって暗示の間主体的な局面がより見えるようになると思われる。

3. 感覚と知覚

暗示の異他的な作用を検討するのに、暗示の圧制的な影響を受けるのは誰であるのか、と問うことから始める。この問題に関して Janet の初期著作の中に 2 人の症例に関する興味深い記述がある。1 人は Justine という極めて被暗示性の高い症例で、「あなたの望むことはすべて受け入れます。あなたに服従できればそれに越したことはないですし、あなたの望む通りにするのですが」²⁰⁾ [p.207] と能う限り恭順の態度を Janet に示しているにもかかわらず彼の暗示にかからないことがあった。もう 1 人は Lucie という症例で、Janet の自分のいうことには従わないようにという指示に対して、彼のいう通りに行動したりはしないと断言しておきながら、実際には暗示のままに動かされており、彼女自身はそのことに全く気付いていなかった²⁰⁾ [p.223]。

感覚と知覚を区別するのに Janet は、感覚の段階ではまだ「私が」と発言する人格が形成されていないため、たとえば視覚であれば単に「見る」と表現するしかないのに対して、諸感覚を総合する主体としての人格の形成を伴う知覚では「私が見る」といえるというように説明していた¹⁹⁾ [p.39], ²⁰⁾ [pp.34-35]。この用法を援用すると Justine と Lucie は、「私が」と発言する知覚主体である限り人は暗示の成立ないし不成立に関与し得ないことを対照的な形で示している。すなわち Justine の場合、知覚主体としての自己がいくら服従しようとしても暗示は不成立に終わり、Lucie の場合は知覚主体としての自己が反抗しているつもりでも暗示が成立している。

暗示が知覚主体の手の及ばないところに位置す

ることは、時間的にみれば、暗示の成立が知覚の時間に先行していることを指し示す。感覚も知覚もともに今という時間にあるようにみえるが、「見る」という感覚の後にしか「私が見る」という知覚が生じ得ないことが示しているように、知覚は感覚に遅れる*3。自己が他者と現に交わるのは過去でも未来でもなく現在においてであるが、この時間は厳密には感覚の今に帰されなければならない。暗示の異他的な作用を被るのは、いわば世界との接触面である感覚の今において活動する感覚主体である。他者と現に交わっているのは感覚主体であって、これに対して知覚主体はたしかに「私が」という主格的自己として能動性を有し、自らの行為に責任を担うような存在ではあるが、自身および他者に関する自らの表象にとらわれて、感覚の今における現実を見損なうことがある。暗示は両主体の差異が——暗示に動かされていることを知らなかった Lucie の場合のように——可視化される1つの契機となる。

暗示に関わる主体の活動は精神分析からすれば無意識的なものであり、Freudの第二局所論の図式¹²⁾[103頁]の中では「知覚-意識」よりも「エス」に近い深層の側に置かれるであろう。しかしこれまでの議論から、感覚主体の無意識的な活動は、むしろ第二局所論における「知覚系」¹²⁾の最表層に位置付けられるべきであり、その意味で意識的な事象である。感覚において主体は外界と接するいわば最前線にいたのであり、世界との現下の交流にこそ感覚の内実は存しているからである*4。この点で『心理自動症』の中でJanetが感覚を「意識下」とみなす一方で、感覚を「要素的意識 (conscience élémentaire)」¹⁹⁾[p.43]といい替えたり、別の初期著作の中では感覚に「それ自体ではおそらく意識的な」²⁰⁾[p.223]という形容を

与えているのは示唆的である。

単なる「見る」の感覚主体は「私」なしに動いており、能動態が主格的自己としての知覚主体の「私が」にふさわしい態であるとする、感覚主体の活動は非能動的なものになる。しかしJanetが感覚を単なる「見る」と表現するとき、「見る」という動詞は明らかに能動態である。私見では、ふだんは背景化している「私」なき感覚主体の非能動的な動きこそが知覚主体である「私」の能動性を裏打ちしており、この意味で感覚主体はずぐれて能動的であるように思われる。

4. 触 発

Janetの感覚と知覚の区別はBiranの強い影響下で構想された。フランス革命期におけるこの在野の哲学者は生の領域を「動物的生 (la vie animale)」「人間的生 (la vie humaine)」「精神的生 (la vie de l'esprit)」¹⁹⁾[p.41]に分けたが、Janetには前二者の区別が重要であった。これに関してJanetが引用しているBiranの議論を参照しておく：「生命機能は結果として動物感覚と呼ばれる内的印象をもたらす。この動物感覚とは快や苦痛の一般的な様態であり動物の存在を作り上げているものである。動物は自分が存在することを知らなくても存在しているし、自分の感覚を統覚しなくても動物としてそのように感じているのである」「デカルト流の完全な意識と機械装置との間に一つの座をもうけ、その座に意識なき感覚をもつ存在、つまりは感覚を統覚する自我をもたない存在をつかせることができる」¹⁹⁾[p.41]。以下ではBiranの表現を借りて、知覚主体の「私が見る」における能動性は「人間的能動性」、感覚主体の単なる「見る」におけるそれは「動物的能動性」と表記し、後者が前者の意味での能動性ではないこと

*3 Janet自身が感覚と知覚の時間関係について、第一主著で「2つの時間」¹⁹⁾[pp.306-307]、その後の著作で「第一の時間」と「第二の時間」²⁰⁾[pp.35-36]という構図のもとで、知覚に対する感覚の時間的先行性を明らかにしていた。

*4 Weizsäcker, V. v.⁴³⁾に依拠しつつ木村²⁵⁾は無意識を「界面現象」として論じている。「界面」も「最表層」もともに境界をなす点で共通しているが、木村のいう「界面」は自己と非自己の「あいだ」²⁵⁾にあって個人には属しておらず、彼自身が強調するようにFreudの「個人的な」²⁵⁾無意識とは水準が異なる。これに対して我々がここで問題にしている「最表層」はFreudのいう心的装置のそれであって、個人に属する。

を明示する。感覚主体はまさに「デカルト流の完全な意識と機械装置との間に」位置するからである。

自我意識なき「動物的生」を「人間的生」から分けるという Biran の構想は彼の初期著作である『習慣論』における感覚 (sensation) と知覚 (perception) の対にまで遡る。感覚は感受的な器官の受動的な印象であり、「この純粹に内的な活動は私のうちで私なしに行われる」²⁶⁾[p.116]。これに対して、知覚は主体の運動に伴う能動的な印象であり、運動を意志するのが「私」であり、またその意志によって動かされるのも「私」であるという二重の仕方では「私」の存在を基礎づけるとされた²⁶⁾[pp.119-120]。Biran は彼のいう動物的な感覚を「触発 (情感) (affection)」¹⁹⁾[p.41] と呼ぶ。触発は「完全な感覚から個性あるいは自我を取り去り、さらにそれに伴う時間的空間的形式をも取り去ったあとに残るもの」であり、たとえば「知的な思考が衰退して墮落したとき」「意志がなくなっているとき」「自我が感覚的印象のなかに埋没してしまっているとき」などの状態がこれにあたる¹⁹⁾[pp.41-42] (強調は原著者)。快や苦痛を範例とする触発において主体は意志的な努力から切り離され、「私のうちで私なしに」なされる感覚と1つになる。主客の区別が失われる仕方では内的・外的に触発されることは自我ではなく「生命機能」に帰されている。

我々は Janet と Biran の議論から二種の「感覚」、すなわち単なる「見る」をその一例とするような「私」なき感覚主体の動物的な能動性による「感覚」と、「私のうちで私なしに」なされる非能動的な「触発」としての「感覚」を取り出した。人間的な「知覚」にしか能動性を認めない Biran は動物的な能動性を否定するであろうが、暗示の成立を捉えるにはこの二種の「感覚」をおさえておく必要があると思われる。以上の議論をもとに、改めて暗示

について考察していく。

IV. 暗示

はじめに暗示の圧制に言及したが、以下では暗示の様態ならびに被暗示者の自己性という暗示の2つの側面に眼差しを向けることで、いかにして暗示が直達的な影響力を行使するのかという問いと取り組む。その中で、Mesmer—Puysegur—Freud という力動精神医学の系譜において一貫して個別主体の意志の力動関係に還元されてきた暗示について別の見方が可能ではないかどうか模索する。予め確認しておく、ここでは精神分析とは異なる立場から暗示を検討するのであり、無意識の力動を扱うことはしない。我々の関心は Freud の暗示解釈の是非を問うことにはなく、上記した力動精神医学とは別のアプローチの可能性を探ることにある。

1. 暗示の様態

冒頭で引用した暗示の圧制への反発に言及したすぐ後に Freud は、次のエピソードを持ち出す：「言いなりになろうとしない一人の病人が《あなたは暗示に抵抗しているのですよ》と大声で叱りつけられた時、私は、これは明らかに不当な行為であり暴行だ、と独りごちたものだ。もし暗示によってその男を屈服させようと試みられているのなら、その男は、暗示に反抗する権利を確かにもっているのだ、と」¹⁰⁾[154 頁] (傍点による強調は引用者)*5。注意すべきなのはこの引用部が暗示の成立していない状況を描いているということである。能動的な「抵抗」にせよ受動的な「屈服」にせよ主体の意志なくしてはあり得ないが、暗示の圧制はむしろそうした主体の意志や主体性を前提とした能動/受動の図式の彼方に暗示が位置しているところに存している。

エピソード②において心因性発作の持続が暗示

*5 ちなみに引用部の原文は以下の通りであり、傍点によって強調した訳語の一部は意識であるものの、原典の文意を適切に反映している：“Wenn ein Kranker, der sich nicht gefügig zeigte, angeschrien wurde: >>> Was tun Sie denn? Vous vous contre-suggestionnez! <<< so sagte ich mir, das sei offenkundiges Unrecht und Gewalttat. Der Mann habe zu Gegensuggestionen gewiß ein Recht, wenn man ihn mit Suggestionen zu unterwerfen versuchte.”¹⁰⁾[p.84]

によって短縮化されていたが、どのようにして目が覚めて体が動くようになったのかという問いに患者本人は「自然に」そうなる、としか答えられず、そこには反抗も屈服も関与していない。エピソード③で筆者は勧誘の拒絶を予め意図し、抵抗していたにもかかわらず、なぜか勧誘に唯々諾々と従っていた。自分自身を驚かせたこの不可解な行為を現在進行形で行う事の中で屈辱感や微塵もなく、自分がミズカラしたことは確かでありながら、そこには能動的にしたという実感が奇妙にも欠落しており、なぜかオノズカラ事がそうなるようにして自分が動いたとしかいいようがない。つまり、あたかも熟した果実が自然に落ちるようにして暗示はオノズカラ成立する。それに対する反抗、当惑や服従など何らかの主体的な反応を相手が惹き起こす以前にすでに相手を「言いなりに」にしてしまうこと以上に「不当な行為」はないだろう。暗示の圧制はこうした類のものであり、通常の圧制とは異なる。

整理してみると、自ずから然る自然としての暗示が生起するのは、被暗示者が暗示者から受け取る外来的な指示と被暗示者自身の内発的な行為との間の懸隔が——暗示者の「暴行」も被暗示者の「抵抗」や「屈服」もなしに——架橋されるそのときである。この架橋の後に初めて暗示の実行へと至るのであり、被暗示者は能動的に、といっても「私」なき感覚主体の動物的能力性をもって暗示を遂行し、事が済んでしまった後で被暗示者は、今度は知覚主体の「私」として、自らのなした行為にときに気付いて驚愕する。他者由来の外来的な指示から自己由来の内発的な行為へという転換がオノズカラ成立する場面において主体はいかなる在り方をしているのであろうか。別のところで我々は、能動的な主格的自己でも受動的な対格的自己でもなく、自ずから然る中動的な過程がそこで産出される場所としての与格的自己を論じたことがある³²⁾。

比較言語学的に池上嘉彦¹⁸⁾は、自然の自発性を重んじる日本語の「なる」の論理を主体の能動性を強調する西欧語、とりわけ英語の「する」の論

理と対比させ、日本語の「なる」の論理が主体の意図を排除し、この排除が「〈動作主〉の〈場所〉化」という特異な文法的特徴を伴うことを指摘していた。たとえば「天皇陛下ニオカセラレマシテハオ召シアガリニナリマシタ」という尊敬文について「〈動作主〉であるはずの主体が、場所化され、その場所であたかも（主体なき）行為が生じているかのような形になっている」という。このことは自ずから然る自発を意味する動詞「みえる」・「きこえる」、助動詞「れる」・「られる」といった中動的な表現でも同様であり、「私には…にみえる」という文でいえば、「私には」という与格としての自己が「みえる」という自然の動きの現出する場所として機能している。与格的自己に出来る中動的過程の例として、自己と他者が双方の意図や予期の彼方でオノズカラ出会う偶然が挙げられるが、自己ないし他者が単独でこの邂逅の成立する場所を形成することはできない。それゆえ与格的自己は一方で個別主体の在り方でありながら、他方では個別主体を超えた間主体的な在り方でもあるという両義性を含む。また間主体的な中動的過程が個別主体の能動的行為を支えていることが統合失調症における偶然の排除²⁹⁾において示されている。偶然が失われると、たとえば戸外で偶々出会っただけの犬が患者の行為を先取りして意図的に待ち構えていた³⁸⁾という異様な相貌を帯びて立ち現れ、個別主体としての患者の能動性は自らの行為を先読みされる形で深く侵害される³³⁾。また何の原因もなく自然に変転していく「基底」³⁸⁾も中動的過程の1つであるが、Schneiderはそこに非精神病的な了解不能性を見出していた³⁴⁾。

再び暗示へと眼差しを戻すと、Biranは暗示が動物的生に属する現象であることを示唆していた¹⁹⁾が、たしかに暗示では「私のうちで私なしに」なされる非能動的な「触発」が問題になっており、生命の原理に従って自然に作動する「触発」はすぐれて中動的な事象である。力関係の圧倒的な不均衡のゆえに抵抗困難なのではなく、そもそも意志が機能しない水準にあるがゆえに抵抗不可能で

あり、自ずから然るようにして生起することは暗示が与格的自己という場所で産出される中動的な出来事の一つであることを示している。暗示者も被暗示者もこの中動的過程に与っている限りで与格的自己という在り方をしている。この見解は能動的に治療をする暗示者には妥当しない、という異議が容易に予測されるが、暗示の基盤としての中動的過程が確保されなければ、暗示者の能動的な働きかけは、先述した症例 Justine の場合のように機能しない。これより Janet を自己批判へと向かわせた暗示の「異他的な作用」の出自は暗示者という個別主体ではなく、暗示者と被暗示者が出会うことで開かれる間主体的な場にあるといわねばならない。異他的な作用はその間主体性のゆえに被暗示者だけが被るものではなく、暗示者もまたそれを免れていない。

中動的過程へと治療者が患者とともにオノズカラ導かれることは、暗示治療に限らず精神療法一般の要であるラポールの成立様式でもある。暗示からラポールへの敷衍が必ずしも不当でないことは、この術語の起源へと遡ると Mesmer に行きあたるといふ史的事実によって支持されよう。彼は似非物理学的に磁気術師が自身の磁気流体を患者に移す「径路」の意味で「ラポール」を用いたが、これは互いに触れ合った人々に電流が伝わる通電現象を「ラポールがついた」と表現した当時の物理学から借用したものらしい⁶⁾〔上 179 頁〕。我々の観点からするとラポールとは、中動的過程としての治療作用をそこに出来させるのに不可欠な場所として、治療者と患者が出会う中で自然に形成される与格的自己のことを指す。この間主体的な場所もそこに生起する中動的過程も決して治療者ないし患者の作為によってもたらされず、反対に

そのような計らいは治療作用が自然に働くのを阻害する。ラポールの有無ないし深淺が治療者の意図的な努力の手前ですでに決してしまっていることは、我々の平均的な日常臨床を顧みれば否定し難い事実であろう。系統的な理論と治療者育成のための制度化された訓練を兼ね備えた正統的な精神療法にも間主体的な中動性に重きを置いているものがあり、その例としてさしあたり森田療法と、やや意外かもしれないが一部の精神分析^{*6)}を挙げておく。

1) 暗示の文法

暗示と中動態の関連について興味深いのは暗示の文法である。暗示の文法について Ellenberger は、ナンシー学派もサルペトリエール学派も主に「命令法」を用いたという⁶⁾〔上 178 頁〕。たしかに暗示の実践について Janet によってそのような命令法の暗示が記載されているが、その一方で先に引用した斬首の暗示の場合も含めて別種の文法を見出すのは困難ではない：「あなたの首は切断されてしまったのです」²¹⁾「ほら腕が動いていますよ」¹⁹⁾〔p.146〕「私が手を叩いたら、あなたは起き上がって部屋の中を一周します」¹⁹⁾〔pp.150-151〕。これらの非命令的な暗示はいずれも事実描写や予言の形をとっており、その言明は事が今そうなっている、あるいは未来においてそうなるという形式を有する。命令が主格的自己による対格的他者への能動的な働きかけを表すのに対して、事実描写や予言ではそのような主体の意図的な作為とは無縁な事実の自然な成り行きが問題となっている。この違いは文法的には命令文が「～せよ」という能動的な「する」に属する動詞をとる一方で、事実描写や予言は「(今) ～になっている」「(これから) ～になるだろう」という中動的な「なる」

^{*6)} 精神分析家の藤山直樹によると、精神分析は「〔引用者註：分析家と患者という〕二人の関与者の手の届かないところで自律的に展開する」¹⁶⁾のであり、こうした自律的な展開である「間主体的体験」は『浮かび上がってくる』『考えがひらめいた』『ふと思いついた』という形で…私たちに去来する」¹⁴⁾。そのように「治療者のこころがひとりで動くこと」は「意図的な『共感』によって困難になる」¹⁵⁾。ここで論じられているのは間主体的な中動的過程としての治療作用であり、この過程に対して分析家は「私たちに」という与格的在り方をしている。これに関連して藤山は「私ではなく、『場』そのものが何かの仕事をしている感覚」¹⁷⁾にも言及し、治療を担うのが主体ではなく場所であるとしている。

という動詞をとることに表れている。実際、たとえばエピソード②で患者に与える言葉として「あと半時間もすればまた歩けるようになります」という予測と、「あと半時間したら歩きなさい」という命令では全くニュアンスが違ってくる。後者では治療者と患者の双方が主格的自己として支配と服従を両極とした潜在的な力関係に置かれるのに対して、前者にはそのような緊張関係はみられない。主格的自己の作為が与格的自己において産出される自ずから然る自然を阻害することは経験的に知られている³²⁾ところであり、今日の暗示関連の文献³⁷⁾において中動態をとる暗示の言明が主流のようであるのはゆえなきことではない。

2. 暗示の自己性

暗示の直達的な影響力と並んで暗示を不可解なものにしているのは、暗示者が被暗示者に植え込み、被暗示者が行う——ときに喜劇的でさえある——非現実的な錯覚や意外な行為である。Janetによる斬首の暗示のような極端な例でなくとも、我々のエピソード①や③の暗示でも被暗示者はその当該の行為の突拍子のなさ、脈絡のなさに戸惑う他なかつたのである。このように暗示は被暗示者のそれまでの在り方に主観的にも客観的にもそぐわないことをもたらす。

我々のたえず更新され変転していくこの今の生はつねに展開途上の生成であることから、そのつどのこの今とそれ以前の過去は地続きであり、Bergson²³⁾がその「持続」という概念で示唆していたように、この今には過去が多少とも凝縮されて現れている。これに関連して個々人の人格が千差万別である主な理由は、各人が生きてきた歴史がそれぞれに異なるからであり、この意味で人格は当人の縦断的な歴史の横断的な表現である。なおここでいう歴史は、完了済みの客観的に確認可能な諸々の出来事が寄せ集められた総体のようなものではない。Bergson³⁾の表現を借りれば「過去の現在への延長」〔37頁〕として、現在へと流れ込みつつ同時にその現在によって今まさに自らを豊かにしつつある1つの全体としての過去を我々

は歴史とみなしている。

人格に具現されている歴史の厚みが「今ここ」における私の行為に対して他の誰のものでもない「私らしさ」を賦与することは自己の自己性を支える主要因の1つに数えられる。もし誰もが他に1つとして同じもののない自らに固有の歴史全体を常に余すところなく体現しているならば、暗示は存在しなかつたであろう。しかし健全者であっても暗示によって一時的に、その人らしい在り方から多少とも逸脱し得る。他者からの直接的な触発を被ることで、自身の歴史による自己性の規定を多少とも免れ得る可能性が良い意味でも悪い意味でも我々には与えられているように思われる。換言すれば人はいつも十全に自己自身であるわけではなく、稀ならず非自己的な自己になり得る。ここに暗示の成立にとって不可欠な基本条件の1つがある。たしかに、この今における他者との交わりが我々の血となり肉となるのであり、他者からの働きかけこそが我々の歴史の内実を主になしている。しかしそうした他者との交流においてたいの場合、自らのそれまでの歴史が自己の行為にその自己に特有の「らしさ」を与えており、それゆえに当人にとってもまた周囲にとっても違和感を生じさせることがない。このように歴史に担われているはずの自己の自己性が暗示においては被暗示者自身を驚愕ないし困惑させる程にまで低下する。

ただし暗示ではいわば自己性の[●]程度が問題になるのであり、被暗示者の自己性はその度合いが下がるという意味で非自己化はしても、自己性の存立そのものが危機に瀕することはない。暗示に従った行為は、感覚主体としての被暗示者が動物的能動性をもって自ら遂行するのであり、統合失調症の作為体験における自己の主体性の他者による圧倒的な侵犯といった事態は生じていない*7。自己の歴史性の度合いが低下する暗示と、自己の能動性の存立それ自体が動揺する作為体験とは同じ自己性の問題でもその水準が異なる。いかなる行為も間主体的な中動的過程から個別主体的な能動性が立ち上がるようにして結実するのであ

り、暗示もこの基本的な枠組みに支えられているが、後述するように統合失調症では間主体的な中動的過程という行為の発生機においてつまづきが生じる。

暗示についてのこの辺りの議論は、Bergson が Janet と同じく 1889 年にソルボンヌ大学に提出した学位論文における自由と暗示に関する以下の考察*8 に少なからず負う：「自由は複数の度合いを容れる。——なぜなら、すべての意識状態が、ちょうど雨滴が池の水と混じり合うように、その同類と混じり合って一体化するなどということはおよそありえないからだ。等質的空間を知覚する限り、自我はある表面を呈示するのだが、この表面上に、それから独立した数々の肥大部が形成され漂動することもありうるだろう。だから、催眠状態において受け取った暗示が意識的諸事象の塊と一体化することはなく…」²⁾ [185-186 頁]。我々の文脈に置き直すと、自己の歴史をよく反映している行為ほど自己性の度合いが高く、池の水によく溶け込む。他方で暗示は自己性の度合いが低い事象として——例外的な場合*9 を除いて——池の水には混じらず、水面に浮いていることになる。強調されるべきなのは、Bergson²⁾ が自己のモデルとした池は非自己性を帯びた暗示も浮遊物として水面に担えることである。

V. 暗示の精神病理

暗示とヒステリーの緊密な関係は E. Kraepelin

lin²⁷⁾ の時代からいわれてきた。先に指摘したように、Janet¹⁹⁾ は彼が暗示を検討する中で見出した「意識野の狭窄」をそのままヒステリーの本態とみなしていた。我々は Janet の暗示論を端緒としつつも彼とは別の視角から暗示を検討し、主体性の拠り所である能動性をときに裏切るようにしてオノヅカラ働く中動的過程という基盤の上に暗示が成立すること、また自己がその歴史に十分に担われず非自己的になり得るという我々に与えられている可能性が暗示において極端な形で現実化することをみてきた。以下ではこの非自己化と中動的過程という二契機からヒステリーの精神病理に考察をくわえる。

1. 非自己化

ヒステリー者の不自然でわざとらしい、虚偽のないし自己顕示的な言動は以前より「演技的」と記述されてきた。この術語がそこから由来する「演技」という言葉は辞書的には、台本に従って役者が観客相手に行う表現行為を意味する。ヒステリー者の言動を「演技的」と表現するとき、そこには「演技」の原義における台本に相当するものは存在しない。にもかかわらず「演技的」という術語が今日まで多用されてきた理由として、ヒステリー者の振る舞いが周囲への訴えかけを多分に含み不自然である様子が、あくまで芝居であって本当の事実ではない演技に通じているから、という類の見解がまず思い浮かぶ。しかしある行為が

*7 「自己」を軸とする議論の中で「主体」への言及があり、両概念の使用に恣意性をみられるかもしれない。この小論では主体の主体たるゆえんの1つとして能動性をみており、能動・受動・中動という様態が問題になる場合には「主体」を用いている。これに対し、自己を他者から分かつ自己性を論じる際は自己も他者も主体であることから「自己」を用いざるを得ない。しかし主体でない自己は想定し難く、能動性は歴史性ととも自己の自己性にとって不可欠な構成要件に属する。「主体」と「自己」の入り組んだ関係から両者を截然と分かつことは文脈によっては困難となる。

*8 「Bergson と暗示」という組み合わせは意外かもしれない。しかし Bergson は Janet と同じ 1859 年生れで、共通の文化的雰囲気包まれていた。またリセで教鞭をとっていた頃、Bergson 自身が催眠実験をしていたことも知られている¹³⁾。

*9 この例外とは、「仮に自我の全体が暗示をみずからに同化するなら、暗示は信念と化したであろう」²⁾ [186 頁] と Bergson が述べている場合である。つまり暗示によって人が自身の歴史をより全体的に反映させた新たな自己を見出すような事態であり、たとえば宗教的回心がその一例となるかもしれない。なお引用文中の「信念」は原文では“persuasion”²⁾ [p.125] であり、精神療法の技法をめぐって Bernheim の「暗示」と P. Dubois の「説得 (persuasion)」の対立⁵⁾ が当時あったことを考慮するならば「説得」とも訳し得る。

「演技的」なのではなく実際に「演技」ならば、それは臨床的には詐病であって、もはやヒステリーとはいえない。ヒステリーという病態にとって本質的である「演技」と「演技的」の隔たりを、その高い被暗示性を通して検討してみる*¹⁰。

被暗示者の暗示に基づく言動は、たとえば我々のエピソード①におけるように、しばしば「演技的」ではあっても決して「演技」ではない。もし「演技」なのであれば、それは暗示とは別物である。「演技」である行為は、「本当であるようで本当ではない」という条件を満たしていなければならない。この条件を満たしていない暗示がそれでも「演技的」であるのは、「演技」という言葉が含んでいる別のある意味を暗示という現象のうちに我々が見出すからである。役者が台本に即して振る舞うという「演技」の原義には——台本が脚本家という役者とはまた別の人物によって用意されたものであることから——役者が内発的に自らの歴史を反映させながら自然に行為しているのではないという意味合いも込められており、「演技」のこの含意は暗示にもあてはまる。暗示の場合、暗示者の与える言明がいわば台本にあたり、被暗示者はこの台本の通りに振る舞うわけであり、その行動において歴史による自己性の規定は上述したように多少とも緩められているからである。ヒステリー者の暗示との高い親和性が示しているのは、肯定的にいえば自己の歴史性による拘束を相対的に免れたという意味で可塑的な、否定的にいえば自己の歴史性に十分に支えられていないという意味で自分らしくない非人格的な領域がヒステリー者では肥大化しており、自己自身の本来の在り様がみえにくくなっているということである。この歴史性に関わるヒステリー特有の病理を「演技的」という術語はよくいいあてている。

ヒステリー者の「演技的」なところはその際立つ

た模倣傾向と関連していようし、解離性障碍の諸現象は我々に与えられている非自己化の可能性を現実化するための様々な手段のさながら見本市であるようにもみえる。歴史性の問題からヒステリー者の非自己化をみる捉え方は Rümke, H. C.³⁶⁾ がヒステリー者の本質的な特徴として取り出した「非真正性(Unechtheit)」によっても支持される。Rümkeはこの非真正性をとりわけヒステリー者における「表出の可能性」や「表出手段」の貧困化のうちに認めていた：「ヒステリー者を長くみていると、『彼らがただ二、三の表情しかもたない』ことがわかる」「表出にニュアンスをつける能力の乏しさから、ヒステリー者が名優であるという見解に私は反対する」³⁶⁾。若い頃には後弓反張を伴う偽発作がみられ、近年も失声や失立などの古典的な転換症状を呈するエピソード②の患者はある診察で自分の長兄の訃報を聞いたと涙ながらに話し出した。彼女の長兄は父親の死後、患者の世話をやいてくれていた人であったが、数年前に脳卒中を患った後は認知症となり施設に入所していた。そのときの彼女の泣き様はいかにも「泣く」という行動について人が思い描くステレオタイプな表出様式をさらに戯画化した類のもので、喜劇において役者がわざとらしく泣く様子そのままであり、近親者の死という重い現実と直面した者がそのような非人格的な泣き方をするということが我々を啞然とさせた。

再び Bergson によるならば、感情は「生き、展開し、ひいては絶えず変化する」²⁾ [148 頁] 現象であるがゆえに、言語という「不動で共通で、ひいては非人格的な impersonnel」²⁾ [147 頁] 社会的手段によってその内実をもっとも奪われてしまうものである。ここでの文脈にそっていい直すと、人のそのつどの感情の動きには、それに直接・間接的に関連している当人の唯一無比の歴史が凝縮さ

*¹⁰ 付言しておく和我々が用いる「演技」という言葉は、Kraus, A.²⁸⁾がその役割理論を展開する中で、父親である、医者であるといった社会的役割を主体が「演じる」というときの「演技」とは異なる。こうした哲学的な語法はたしかに発見的であるが、ヒステリー臨床で問われる「演技」と「演技的」の区別に関しては、この問題設定それ自体を困難にする。この小論ではごく日常的な語法に従っており、たとえば医者である人が日常会話で「私は医者を演じている」などとは言わない。

れて込められているはずであり、それが当該の感情にその人に特有のニュアンスとともに自然な深みを与える。Rümke がヒステリーのメルクマールとみなした表出の貧困化は、歴史が感情に賦与すべきその人独自の陰翳がヒステリー者においては少なからず欠けているために、感情がその人らしさを失って脱人格化され、一般性を帯びてくることを示している。

この一般性においてヒステリーと離人症の重なりが見出せるように思われる。以前に我々は健忘失語との対比のもとで離人症を検討した³¹⁾。健忘失語の患者がつかまずくのが物品の呼称を尋ねる「これは何ですか」という問いである。たとえばパイプを呈示されても失語症者は「パイプです」と答えられない。この問いに含まれる「これ」と「何」は対象の経験を構成する異なる次元を表している。「何」にあたるのは概念であり、以下の意味で「一般的なもの」である。すなわち概念はいつ誰によって用いられようともほぼ同一であることから時間超越的であり公共的である。他方「これ」は主体の現在の一人称的なパースペクティブに結びついている。「これ」が表すのは、この今において主体が現に体験している「このもの」だからである。失語症者は現在の「これ」に束縛され、時間超越的な一般概念である「何」を捉えられない。これに対して離人症者は対象の「何」は難なく把握できている。しかし当該対象がその「何」によって表される一般概念に属する他の無数の対象のどれでもなく、今ここで体験されている「このもの」であることに基づく対象の存在感や質感が見失われる。離人症者は失語症者とは対照的に「これ」との連関が不全に陥っている。

ヒステリー者において自らの歴史によって担われるところが少なくなり、自己の自己性の度合いが低落して非自己化が亢進することによって、人格的な単独性が非人格的な一般性へと変質することから、「このもの」を見失って「一般性の霧」³⁹⁾の只中に置かれる離人症者と類縁関係に置くことも不可能ではない。ただしヒステリーはその一般性の病理の裏面として他者への過剰な開けをもつ

のに対して、離人症ではそうした他者との交流が断たれている。他者への開けは暗示のもう1つの側面である中動的過程と結びついており、次に中動的過程の病理としてヒステリーをみていく。

2. 中動的過程

自己と他者は与格的な在り方において両者が共同して同じ1つの場所となることによって両者を隔てる差異を超えて互いへとオノズカラ開かれる。こうした自他の相互的な交わりがどのような内実を含んでいるかということは、与格的自己において生起する中動的過程に応じて様々である。例として自己と他者が双方の意図や予期の彼方で邂逅する偶然や、両者が表情や仕草の自然なやり取りの中で本能的・感情的に互いを開く身体表出などが挙げられる。

暗示においてもその基盤として中動的な自然が働いていることから、暗示者と被暗示者の間には——暗示が偶発的である場合は不明確であるにしても——両者の意図を越えたオノズカラの交流がみられる。その内実は感情面のみならず表面にも及ぶことが稀でなく、身体表出の場合よりもさらに具象性を帯びている。ここでまた被暗示者が暗示者に開かれるのはよしとして、暗示者が被暗示者に対してそうなることは想定し難いという反論が予測される。しかし磁気術の時代から被暗示者が暗示者の表に出していない意向や身体感覚さえ敏感に察知するという事実が知られていたことをEllenbergerが指摘している：「メスメリストたちを感銘させたものは…磁化された者が磁気術師の考えていることはもちろん身体感覚さえ認知する能力をもっていることである」⁶⁾[上179頁]。被暗示性が亢進するヒステリー者においては、自己と他者の間で両者の作為を越えた自然な交感が容易に生じるような対人関係の網がはりめぐらされており、その網にどのように絡め取られるかによって治療者はときに陽性感情を、ときに陰性感情を抱くことになるのであろう。

一般に与格的自己の場に来る中動的過程における自他の相互交感を可能にする時間は現在で

ある。素朴にみて、そもそも現実の他者と自己が交わるのは現在を措いて他にはあり得ない。未来や過去の他者は結局のところ自己によって措定された他者の表象にすぎないのであって現実の他者ではない。他者への開けを時間的に可能にしているのが現在という時間性であるとする、ヒステリーにおける他者からの直接的な触発の過剰は、それが現在中心的な病態であることを示している。誤解のないように補足すると、現在における他者との接触こそが自己の活動の中心を占めるのであり、問題なのは、その他者との出会いがそれまでの自己の歴史をそこに反映させつつさらにそれを更新し豊穰化させるものたり得ているかどうかである。暗示において典型的にそうであるように、ヒステリーではそのような過去とのつながりから多少とも遊離した現在が前景化する^{*11}。これに関連してすでに Janet に次のような指摘が見出せる：「ヒステリー者は今現在考えていることのためにすべてを犠牲にしてしまう」¹⁹⁾[p.68 (Préface)]。

我々は現在においてしか生きて現にあることができずという意味で生の直接的な表現である現在は絶えず生成流転し、客観的時間の一時点に固定することは決してできない。歴史による規定からいくらか逸脱するヒステリー者ではこの生きている現在との連関に偏りがちとなり、暗示という他者からの触発に過度に開かれる。中動的過程がそこに出来る与格的自己という場所に他者ともになることが生の生成としての現在と関わるために不可欠な条件の1つであるが、統合失調症者はこの基本条件を十分に満たせなくなっている。先に中動的過程の例として偶然と身体表出を挙げたが、統合失調症ではまさにこれらの事象に特有の病理が認められる。偶然の排除に関してはすでに述べた通りであり、また統合失調症者の身体表

出を記述するのに日常臨床で頻用される「硬い」「冷たい」といった形容は間主体的な身体的交通の機能不全を表している。これらの病理は、中動的過程がそこで産出される場所である与格的自己を他者とともに形成することが困難になっていることを指し示しており、そのような統合失調症者は中動的過程をその成立基盤とする暗示にかかりにくいことになる。

ヒステリーでも DSM¹⁾がその解離性障碍の項目に離人症を含めたように、生の動きとしての現在からむしろ隔絶された病理であるかのような様相を呈することがある。しかし繰り返し指摘したように、これは自らの過去とのつながりが多少とも弛緩していることに由来するものであり、ヒステリー者の歴史性に関わるこうした問題はその現在中心性とコインの表裏の関係にある。先に言及したヒステリーにおける離人症様現象と離人症との異同をここで時間性に焦点を合わせていい直しておけば、ヒステリーの現在中心性由来する離人症様現象は、現在の「これ」が見失われてしまい時間超越的な「何」しか残されていない離人症とは似て非なるものである^{*12}。

おわりに

Janet の再発見が世界的に進行している今日もなお、彼が終生問い続けた暗示という問題は講壇精神医学において等閑視されたままのようである。今回、Janet の強い促しに応えるべく門外漢の立場から敢えて暗示の考察を試みた。暗示は Mesmer—Puységur—Freud という力動精神医学の系譜において一貫して個別主体の意志の力動関係に還元されてきた。これに対して我々は Biran と Janet の暗示論を手掛かりに暗示の基盤に中動的過程があることを論じた。また Janet と互いに影響を与え合った Bergson に依拠しつつ、人

^{*11} ヒステリー者における他者との交感と現在中心性は、てんかんの精神病理をめぐって安永⁴¹⁾がその「中心気質」に関して、また木村がその「イントラ・フェストゥム」^{23, 24)}に関して取り出していた周囲との一体化や利那主義という特性にも相通じるところがある。

^{*12} なお離人症と統合失調症の関係について我々は安永⁴²⁾の次の見解に与している：「離人症は、分裂病の体験世界に参入する『門』としての位置を占めている」。

が——正常か異常かを問わず——総じてつねに自身の歴史を十全に担った自己であるわけではなく、とくに暗示において非自的になり得ることを指摘した。中動的過程と非自己化という暗示の二契機から暗示の周辺問題としてヒステリーを検討し、ヒステリーと関連する病態として統合失調症や離人症などにも言及した。

Janet に対しては Freud のように無意識を自然科学とは異なる観点から探索するに至らなかったといわれる²²⁾。初期の Janet における「感覚」という概念はたしかに現代神経科学の議論、たとえば荜阪³⁵⁾のいう「自己意識」の下層にある「知覚・運動的意識」に接続可能である一方で、この今において世界と交わる生成の動きを主題化する人間学的観点をも含む。後者に関していえば Janet の「感覚」は、Freud の第二局所論の図式における「知覚-意識」の最表層に位置し、暗示はこの最表層で生起する。また Bergson は自己を「池」に喩えた際に暗示の場所を池の水中でも水底でもなく、外界と接する水面に割り当てた。Janet と Bergson の暗示論は「最表層の無意識」という Freud とは別の視座があることを示唆する。心的装置の最表層において動物的能動性の様態にある「感覚」を規定する間主体的な中動的過程は、Freud が深層に位置する無意識の能動的な主体をもって解釈した様々な局面に関していえば、その一部でしか想定し得ないであろう。また Freud のいうエスとおそらくは密接な関係もなお明らかでないことから、最表層の無意識を規定する中動的過程が占める領域やその射程は今後さらに検討していかなければならない。

本稿の一部は、日本精神病理・精神療学会第 35 回大会(博多, 2012)にて発表した。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

稿を終えるにあたり、臨床と研究の両面にわたる御懇篤な御指導に対して、もみじヶ丘病院名誉院長大谷互先生と同病院長南部知幸先生に厚く御礼申し上げます。なお Janet の暗示論に関して同院副院長菅間正人先生の私家版『心理自動症』(全訳)を参照および引用させて頂いた。催眠療法の実際については吉田クリニック院長吉田稔先生か

ら多くの貴重な御教示を頂いた。本論中の精神療法に関する考察は慶應義塾大学精神病理研究グループとくに古茶大樹先生との対話に負うところが大きい。ここに付記して各先生方に深謝致します。また本稿のもとになった発表に対して貴重な御意見を頂いた京都大学名誉教授木村敏先生とその主催されるアポリアの会の諸学兄に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) American Psychiatric Association : Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders : DSM-IV-TR. American Psychiatric Association, Washington, D. C., 2000 (高橋三郎, 大野 裕, 染矢俊幸訳: DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版, 医学書院, 東京, 2003)
- 2) Bergson, H.: Essai sur les Données Immédiates de la Conscience (1889). PUF, Paris, 2007 (合田正人, 平井靖史訳: 意識に直接与えられたものについての試論—時間と自由, 筑摩書房, 東京, 2002)
- 3) Bergson, H.: L'Évolution Créatrice (1907). PUF, Paris, 2007 (合田正人, 松井 久訳: 創造的進化, 筑摩書房, 東京, 2010)
- 4) Chertok, L., Saussure, R. de.: Naissance du Psychanalyste. De Mesmer à Freud. Payot, Paris, 1973 (長井真理訳: 精神医学の誕生—メスマルからフロイトへ—, 岩波書店, 東京, p.24, 1987)
- 5) 江口重幸: 精神療法の歴史, 精神療法の実際(専門医のための精神科臨床リユミエール 11) (青木省三, 中川彰子編), 中山書店, 東京, p.17-29, 2009
- 6) Ellenberger, H. F.: The discovery of the unconscious. The History And Evolution of Dynamic Psychiatry. Basic Books, New York, 1981 [木村 敏, 中井久夫監訳: 無意識の発見(上・下)—力動精神医学発達史, 弘文堂, 東京, 1980]
- 7) Freud, S.: Zur Einleitung der Behandlung. Gesammelte Werke. Band VIII, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, S.453-478, 1978 [道旗泰三訳, 治療の開始のために, フロイト全集 13 (新宮一成, 鷺田清一ほか編), 岩波書店, 東京, p.268, 2010]
- 8) Freud, S.: Zur Geschichte der psychoanalytischen Bewegung. Gesammelte Werke. Band X, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, S.43-113, 1981 [福田覚訳: 精神分析運動の歴史のために, フロイト全集 13 (新宮一成, 鷺田清一ほか編), 岩波書店, 東京, p.53, 2010]
- 9) Freud, S.: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. Gesammelte Werke. Band XI, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1978 [高田珠樹, 新宮一成,

須藤訓任ほか訳：精神分析入門講義。フロイト全集 15（新宮一成，鷺田清一ほか編），岩波書店，東京，p.544，2012]

10) Freud, S.: Massenpsychologie und Ich-Analyse. Gesammelte Werke. Band XIII. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, S.71-161, 1976〔藤野 寛訳：集団心理学と自我分析。フロイト全集 17(新宮一成，鷺田清一ほか編)。岩波書店，東京，p.127-223，2006〕

11) Freud, S.: Kurzer Abriss der Psychoanalyse. Gesammelte Werke. Band XIII, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, S.403-427, 1976〔本間直樹訳：精神分析梗概。フロイト全集 18（本間直樹編）。岩波書店，東京，p.247，2007〕

12) Freud, S.: Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. Gesammelte Werke. Band XV, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1979〔道籟泰三訳：続・精神分析入門講義。フロイト全集 21（新宮一成，鷺田清一ほか編）。岩波書店，東京，2011〕

13) 藤田尚志：唯心論（スピリチュアリズム）と心靈論（スピリティズム）—バベルクソン哲学における催眠・テレパシー・心靈研究。フランス語フランス文学研究，第 91 号；168-182，2007

14) 藤山直樹：ものが単なるものでなくなること—わからぬこと，生きていること，開かれること。精神分析という営み 生きた空間をもとめて。岩崎学術出版社，東京，p.81，2003

15) 藤山直樹：共感という罫—不可能な可能性。同書，p.145

16) 藤山直樹：精神分析における語りの虚実—本物の語りとは何か。〈かたり〉と〈作り〉臨床哲学の諸相。河合文化教育研究所，東京，p.132，2009

17) 藤山直樹：こころの臨床実践の場をめぐるもの思い。続・精神分析という営み 本物の時間をもとめて。岩崎学術出版社，東京，p.138，2010

18) 池上嘉彦：「する」と「なる」の言語学。大修館書店，東京，p.199-200，1981

19) Janet, P.: L'automatisme psychologique. Essai de Psychologie Expérimentale sur les Formes Inférieures de l'Activité Humaine (1889). L'Harmattan, Paris, 2005

20) Janet, P.: L'État Mental des Hystériques (1911). Laffitte Reprints, Marseille, 1983

21) Janet, P.: Rapport sur la suggestion, Schweitzer Archiv für Neurologie und Psychiatrie, XX ; 5-22, 1927

22) 兼本浩祐：ヒステリーから解離へ—DSM の変貌，Freud から Janet への回帰，PTSD，解離性障害（専門医のための精神科臨床リユミエール 20）（岡野憲一郎編）。中山書店，東京，p.33-41，2009

23) 木村 敏：てんかんの存在構造。てんかんの人間学（木村 敏編）。東京大学出版会，東京，p.59-100，1980

24) 木村 敏：鬱病と躁鬱病の関係についての人間学的・時間論的考察。弘文堂，東京，p.171-208，1992

25) 木村 敏：無意識と主体性—遺伝子のゲシュタルトクライス。偶然性の精神病理。岩波書店，東京，p.167-213，1994

26) 北 明子：メヌ・ド・ピランの世界 経験する〈私〉の哲学。勁草書房，東京，1997

27) Kraepelin, E.: Über Hysterie. Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie, XVIII ; 261-279, 1913

28) Kraus, A.: Sozialverhalten und Psychose Manisch-Depressiver. Eine existenz- und rollenanalytische Untersuchung. Ferdinand Enke, Stuttgart, 1977〔岡本 進訳：躁うつ病と対人行動 実存分析と役割分析。みすず書房，東京，p.36，2001〕

29) Minkowski, E.: Le Temps Vécu (1933). PUF, Paris, 1995（中江育生，清水 誠ほか訳：生きられる時間 2。みすず書房，東京，p.286，1973）

30) Ogden, T.H.: The Matrix of the Mind, object relations and the psychoanalytic dialogue. Rowman & Littlefield Publishers, Inc. Lanham, 1990〔狩野力八郎監訳，藤山直樹訳：こころのマトリックス。岩崎学術出版社，東京，p.119，1996〕

31) Oka, K.: Zur Psychopathologie der Depersonalisation. Der Nervenarzt, 77 ; 823-829, 2006

32) 岡 一太郎：対人恐怖と社会恐怖の比較文化的研究—日独の患者における視線体験の相違—。精神経誌，111 ; 908-929，2009

33) 岡 一太郎：妄想知覚の時間病理。精神経誌，113 ; 9-25，2011

34) 岡 一太郎：Kurt Schneider の形而上学的問題について。臨床精神病理，33 ; 149-164，2012

35) 菅阪直行：意識とは何か。科学の新たな挑戦。岩波書店，東京，p.17-18，1996。

36) Rümke, H.C.: Allgemeine psychologische und psychoanalytische Auffassungen über Hysterie. Psychiat Neurol Bl, 39 ; 487-531, 1935

37) 齋藤稔正：新版 催眠法の実際。創元社，大阪，2009

38) Schneider, K.: Klinische Psychopathologie. 6. Auflage. Georg Thieme. Stuttgart, 1962（平井静也，鹿子木敏範訳：臨床精神病理学。文光堂，東京，1978）

39) Straus, E.: Vom Sinn der Sinne. Springer, Berlin, S. 18, 1956

40) Trillat, E.: Histoire de l'hystérie. Seghers, 1983.
(安田一郎, 横倉れい訳: ヒステリーの歴史, 青土社, 東京, p.212, 1998)

41) 安永 浩: 中心気質という概念について, てんかんの人間学 (木村 敏編), 東京大学出版会, 東京, p.21-57, 1980

42) 安永 浩: 離人症, 異常心理学講座第4巻 神経

症と精神病1 (土居健郎, 笠原 嘉ほか編), みすず書房, 東京, p.216, 1987

43) Weizsäcker, V. v.: Der Gestaltkreis. Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen. Thieme, Stuttgart, 1947 (木村 敏, 浜中淑彦訳: ゲシュタルトクライス, みすず書房, 東京, 1975)

On Suggestion and its Related Problems

Kazutaro OKA

Momijigaoka Hospital

Recently, intensive discussions about dissociative disorders have led to the rediscovery of the psychology of P. Janet, that has been under the shadow of Freud's psychoanalysis. Nevertheless, psychiatry, "Schulpsychiatrie" in German, has still paid little attention to the suggestion with which Janet has occupied himself throughout his long career. In this paper, the author examined suggestion from another point of view other than psychodynamic. It is presented that Freud reduced suggestion to a specific relation between an active subject and a passive object, as his precursors, F.A. Mesmer and R. de Puységur did the same. In contrast, Janet's early studies influenced by the philosophy of M. de Biran seem to focus on another aspect of suggestion. From this aspect, suggestion is based on a spontaneous intersubjective process that should be expressed by the middle voice. Referring to H. Bergson, with whom Janet corresponded, the author pointed out that one is not always one's own self that reflects one's whole life history, regardless of the presence/absence of mental abnormality, as is the case with a person under suggestion. Taking into account these factors of suggestion, i. e., the middle voice and fragile selfhood that is not firmly rooted in one's own life history, the author investigated hysteria as a distinct phenomenon that has a particularly close relation with suggestion. Furthermore, depersonalization and schizophrenia were discussed concerning their relation with hysteria. In this approach, the author suggested that the unconscious could be topographically localized not only in a deep portion of the mental apparatus, but also in its most superficial portion, unlike in the case of Freud's psychoanalysis.

<Author's abstract>

<Keywords : suggestion, Pierre Janet, hysteria, middle voice, unconsciousness>
